



H.C.R. 2007 ふくしのスキルアップ講座報告

vol. 4

H.C.R. 2007では、福祉・介護職のスキルアップを図るため、多彩な専門職講座を開催いたしました。保健福祉広報協会ではその内容を順次H.C.R.ニュースに掲載しております。今回は「動植物など自然の力を活用したセラピーの効果と可能性—環境福祉学の活用に向けて」です。

動植物など 自然の力を活用した セラピーの効果と可能性 —環境福祉学の活用に向けて

2007年10月3日(水)

近年、わが国ではこころの病い等をかかえる人が増え、社会的にも問題になっている。

福祉施設の入所者に関しても、心の病いをかかえた人への多方面からの支援が必要となっており、施設での介護に加え、心のケアをおこなう環境整備が必要とされている。

福祉施設における森林、動物、園芸、温泉などを活用したセラピーの事例を紹介し、その効果と可能性を考えた。

自然環境力の福祉への活用

財団法人休暇村協会理事長（当時）
前環境事務次官
環境福祉学会副会長
炭谷 茂氏

本日は「自然環境力」というものを福祉や医療にどう利用するか、そのアウトラインをお話します。自然環境力とは何か。これは非常に幅広いもので、体系的に捉えることが必要です。まずはイギリスでの取り組みの歴史をご説明します。

英国での取り組み

現在、世界の看護の中心を占めているのは、ナイチンゲール看護という考え方です。この考え方は実は、自然環境力を中心に据えています。ナイチンゲールは「看護にあたっては食事や睡眠、休息や排泄などを大切に下さい」と言いましたが、それ

以前に重視したのは「大気や太陽の日差し、暖かさといった、自然環境を十分に活用して看護にあたること」でした。

次にオクトビア・ヒルという女性がいました。ナショナルトラスト運動の創始者の一人です。彼女が活躍した19世紀終わりから20世紀はじめの英国には健康状態の悪い貧困地域が数多くありました。貧困地域の健康を改善し、生活水準を向上させるために、彼女は広い空間＝「オープンスペース」をつくり公園にしようと尽力しました。現在イギリスにある公園のいくつかは、彼女の運動で、貴族の土地を解放するなどして作られました。これによって貧困地域の環境は格段によくなったのです。

また、デューク親子という社会運動家がありました。精神医療が未発達だった19世紀、彼らは、精神障害者にとって重要なのは温かいパンと豊かな自然だと主張し、それらを得るために努力しました。ちなみに、私が滞英中、たまたま隣家にジョシユア・ビエラという人がいました。第二次大戦後、世界で初めて、ベッドがない精神科医療を始め、患者を校外の自然の中に出して治療に成功した人でした。

このように、英国ではナイチンゲール以来、自然環境力をいかに使うかという考えが定着しています。次に日本での研究例を見てみましょう。

日本での研究例

まず、信州大学の平野吉直先生の調査です。最近の子供は自然の中で遊ぶ機会が減りましたが、自然体験の多い子は正義感が強く、人に優しくしよう、人のために何かしようという奉仕の精神が強くなります。逆に自然体験がほとんどない子には、いじめやひきこもりなどの問題が生じやすい傾向があります。こうしたことを平成10年の全国11,000人の小中学生の実態調査で明らかにしたものです。

次に、日大理学部の森昭雄先生が言い始めた「ゲーム脳」というもの。屋内でゲームばかりやっていると、想像力や思考力を司り、感情の抑制などをおこなう脳の前頭前野という部位の血流が悪くなることを、彼は科学的に示しました。その治療には、自然の中での遊びやウォーキングが効果的だということです。

このように、日本での最近の実証研究でも、自然環境力が役立っていることがわかってきます。しかし、最近の自然環境はどうでしょうか。広場はなくなる、川辺はコンクリートで固められる。昭和40年には、子供たちの遊び場が屋外よりも屋内の比重が大きくなりました。自然とのふれあいが少な

パネリスト



姥山 寛代氏
特定非営利活動法人
NPOゆきわりそう
理事長



福田 久美子氏
株式会社美交工業
専務取締役



炭谷 茂氏
財団法人休暇村協会理事長（当時）
環境福祉学会副会長

コーディネーター



堀越 大哲氏
学校法人堀越学園理事長・
創造学園大学学長

くなれば多くの問題が生じます。

自然との関係を福祉の世界でうまく利用していくことが今日のテーマです。そこでまず、保育について考えましょう。

保育と環境

まず施設面です。最近の保育所は、保護者、母親を中心にして作られているのでは、と個人的に感じます。例えば、駅前保育などは、母親にとっては便利です。でも、駅近くのビルの一室で育てられると赤ちゃんはどう育つのでしょうか。残念なことに、現在の保育園の設備基準では、そうした面の配慮は足りません。子供の成育を考えると心配です。やはり保育も、豊かな緑に囲まれての方がいいのではないかと思います。

一方、保育施設でのプログラムに、学ぶべき領域のひとつとして「環境」が取り上げられるようになりました。環境が子供たちの生育に重要だと認識され始めたのはいいことです。

しかし、保育園での自然環境力の利用は、残念ながら十分ではありません。例えば金魚やウサギなどを飼って自然環境の問題を勉強している、秋にはどんぐりや落ち葉を見て、それで自然に接している、という程度のプログラムで満足しているところが多いのではないかと。それでは効果は不十分です。プログラムとして重要なのは、自然の中で実際にふれあうことだと思うのです。

障害者施設と環境

障害者の施設でも同様です。ここでも施設とプログラムの両面で考えます。特に施設の面が重要です。大変重い障害のある子供には、生まれてから亡くなるまでずっと施設の中で生活せざるを得ない場合も多いのです。せめてその施設が自然環境の豊かなものであってほしいと思います。

プログラムについても、障害者だからといって、単にベッドで寝て食事して入浴するだけでは不十分です。生きがいや楽しさが必要です。今日お話のある乗馬療法や園芸療法なども、必ずしも健康面で劇的な効果があるものではないかもしれない。でもそれは障害者に、心身や情緒的な面で、大変によい影響を与えるのではないかと思います。

自然環境力の福祉の面での活用は、日本では遅れています。今日は皆さんと一緒に考えるよい機会になるのではないかと思います。

動物などの自然の力を活用したセラピーなどの効果と可能性 — 環境福祉学の活用に向けて

特定非営利活動法人
NPOゆきわりそう 理事長
姥山 寛代 氏

私は20年間、「ゆきわりそう」という団体を主宰してきました。始めた当初は、障害者は文化やスポーツ、豊かな居住生活が得られない、大変厳しい時代でした。この20年で相当に豊かなプログラムが準備できるようになったと思います。今日はその中の、自然や動物と人が一体になって作り上げたプログラムを皆さんにご紹介します。

また、私たちは乗馬以外にも多くのプログラムを持っています。大自然の海の中で重度の障害者が野生のイルカと泳ぐプログラムについては、今後公開していきたいと思っています。

ハローヒポの実践活動

前日から体調を整え、元気で現地に出かけ、元気に帰ること。これを何年も繰り返しておこなうと、経験が成熟して能力が発達する道のりを、人生に取り込んでいくことができます。プログラム名は「ハローヒポ」、お馬さん今日は、という意味です。重度の障害者たちが、豊かで素晴らしい喜びの時を得る体験を、民間の私たちの力だけで積み上げながら、多くの方々の共感を得て今日に至ったことも、ご報告したいと思います。

(以下、映像を見ながら、インストラクター黒田朋子氏の解説)

ハローヒポの外馬場でのレッスンをご紹介します。ここで紹介する6歳の女兒は乗馬歴4年。立って歩くことはできないので抱き上げて乗せます。障害がある方の乗馬では乗り降りに時間がかかり、その間ポニーにはじっと待つことが求められます。騎乗時には身体に無理な負荷がかからぬよう、ゆっくり細心の注意を払いながら乗せます。正しいポジションに調整することで自分でバランスを保って乗ることができます。

現在、世界では乗馬療法の概念は、治療的効用を求めて用いる三つの応用分野の総称として用いられています。それに次ぐ四つ目としてすでに多くの

専門家が実践している心理的療法乗馬がありますが、これはまだ理論的に確立されていません。

応用分野の第一は、馬の運動作用を利用しておこなうヒポセラピーです。セッションは医学療法士のなかでも特別な勉強をしたヒポセラピストがおこない、障害者は騎乗者ではなく患者と位置づけられます。

第二は、馬に乗る喜びを通じ、身体的、精神的な発達や社会性の体得を目的としたセラピューティックライディングです。セッションは特別な勉強をした乗馬インストラクターがおこない、医学療法士や特殊教育の専門家が支援します。

第三は、スポーツ・レクリエーションとしての乗馬です。余暇活動から競技スポーツまで幅広い運動であり、セッションは乗馬インストラクターがおこないます。乗馬技術の習得が主目的で、自立した騎乗者を目指します。また、スポーツ・レクリエーションを通じ、障害による運動不足や行為障害、二次障害を予防することに力点が置かれています。

ハローヒポでは、セラピューティックライディングとスポーツ・レクリエーションとしての乗馬に取り組んでいます。対話なくして馬との真の信頼関係は生まれません。近寄った時からお互いの関係が始まります。馬と障害者は、身体と馬体の触れあいによる非言語的コミュニケーションによって関係を築くことが可能です。これが徐々に、他者との交流やコミュニケーションをおこなう上での自信につながります。

また、騎乗して馬の多角的な動きを体験することにより、知覚、視覚、臭覚、触覚、聴覚を刺激し、固まってしまった運動や行動パターンを解くことができます。さらに、騎乗者は馬の動きに伴わないと調和のとれた運動感が得られないため、馬のリズムに合わせ、自身の動きを調整することが求められます。この調整がなめらかなほど両者の関係は強まり、人馬一体となることのできるのです。人馬一体となることで持続する勇気と動機付けが生まれ、他の目的を達成する可能性が増えます。

障害者乗馬の馬たちは穏やかで常に冷静であることが求められています。かなりの我慢を強いられることも少なくありません。そのストレスを解消するために放牧もしています。

重度の障害を持つ女性の定期的なレッスンについてお話します。ハローヒポに到着すると、実際に乗る前に手綱の使い方や作用を勉強します。馬に乗るだけでなく、馬具の機能を実物を使って学びます。自ら馬になってみて馬の状態を理解し、手綱の持ち方、使い方、加減などを乗る前に練習します。

昨年6月、群馬馬事公苑でクリニックをおこないました。ハローヒポでは毎年、世界的に活躍している障害者乗馬の専門家を招きクリニックを開催しています。乗馬が障害を持つ騎乗者に対し、最も高い効果をもたらすものとなるよう、指導とアドバイスをもらい、指導者が今後につながる指導技術を学ぶ場となっています。

講師にお呼びした2人は、まずメアリー・ロングデンさん。障害者乗馬だけにとどまらず馬術全般のスペシャリストです。それからビッキー・メルビルさん。国際クラシファイアーを務め、ニュージーランドや香港などで指導しています。



動物などの自然の力を活用したセラピーなどの効果と可能性 — 環境福祉学の活用に向けて

株式会社美交工業
専務取締役
福田 久美子 氏

私たちは大阪にあるビルメンテナンス業の小規模な会社で、公共施設の清掃を請け負っています。5年ほど前から知的障害者の雇用を始め、障害者雇用率は現在27.14%、多くは知的障害者です。今日は、福祉施設での園芸福祉の取り組みや、府営公園での指定管理者としての園芸福祉の効用を活かした取り組みなどをご紹介します。

企業として できることを

歴史的に見て、清掃業者には戦後、社会的困難を抱える人たちの受け皿としての役割がありました。バブル崩壊後、入札価格の下落やダンピングによって働く人たちの待遇が悪化するなか、私たちは支援者との出会いをきっかけに障害者雇用を始めました。

ここで、ただ雇い入れるだけではなく、支援者と会社との連携によって障害者雇用の定着に結びつけること、就労面と生活面との相互関係がないと安定した雇用には結びつかないことなどを、私たちは学びました。そうした相互関係を大切にして、清掃先ビルのオーナーの理解を求める努力を通し、いっそうの安全面の配慮や、視覚情報による作業手順書や作業道具の色分けなど、作業の各種改良も進めました。社内で課題を話し合う中で、「人と環境とのつながりを大切にしたい社会づくり」を理念に掲げ、「事業活動を通じて、企業としてできることをまじめに考え、楽しみながら取り組む」ことをおこなってきました。

業務を通じてできることには何があるのでしょうか。大阪市では近年、ホームレスが問題になっています。当社は市内の公園の清掃を受託しており、園内でホームレスの掃除姿も見してきました。そこで、彼らを雇用して仕事ができたら、公園からその姿も減り、彼らも畳の上で生活ができるのでは、と考えました。「いいことをやろう」というより、あくまで市からも仕事を頂く立場で、会社のサービスとしてお

こなっていくというものです。

障害者雇用で学んだ生活面・就労面の相互関係の重視を念頭に入れて、自立へ向けての生活支援に、ソーシャルワーカーとともに取り組みました。ホームレスはアルコールやギャンブル、借金などさまざまな問題を抱えており、その解決なしには雇用定着には結びつけられません。弁護士や医療関係者などと工夫を重ねてきました。環境イベントのボランティア活動にホームレスと一緒に参加したり、野宿者への情報誌のスポンサーの活動もしています。

こうしたことがだんだん外部に評価され、各種の表彰も頂くようになりました。嬉しいことですし、社内のモチベーションも上がります。「もっとできることはないか?」と考えるなかで、就職困難者の職場環境を整えるために、スタッフや福祉施設職員や利用者とのよりよいコミュニケーション作りを目的として、NPOとのコラボレーションで、受託先の福祉施設に環境福祉サービスとして園芸福祉をおこなうことにしました。

府営公園での 取り組み

園芸福祉活動の考え方は、植物と接することによってもたらされる効果を活かすことです。「みんなで幸せになろう」という考え・技術・運動の実践であり、地域に暮らすさまざまな人たちが同じ立場で参加し、植物を通して人と人とのつながりを作っていくというものです。その中で社会的・福祉的効果や療法的効果を期待できると考えます。

現在、特養の高齢者と知的障害者という、異なる特性を持った施設利用者を対象に活動しています。NPOとともに、高齢者が活躍できたり、体力のある知的障害者が木工作业などで活躍できるもの、また認知症の場合なら、連続性があり、前回何をしたか思い出させるようなものなど、さまざまなプログラムづくりから始めて、1年半ほど経過しました。

施設側から評価された成果と効果としては、高齢者では活動と共に次のケアにつながってきた、毎週楽しみにしている等、また知的障害者では就労への訓練の一部になっている等があります。

今年10月から、大阪府で福祉施設の先進的取り組みのパイロット事業を募集しており、園芸福祉を地域貢献事業としてできないかと、コミュニティガーデン事業を提案したところ、採用され、3年間の事業になりました。福祉施設を舞台に二つのNPOと私たちが協業者として事業を手がけます。

さらにこれまでの活動の集大成として、去年4月

から、NPO法人釜ヶ崎支援機構とのジョイントベンチャーによる大阪府営住吉公園の運営管理に、指定管理者として参画し、いろいろな提案をさせてもらっています。その一つがレンタサイクル事業です。公的に処理され販売されている撤去自転車を、寄付を募って買い取り、ホームレスの仕事として無料貸し出しをおこないます。公園の利便性や公園を拠点にしたまちづくりのツールとして、また地域のスポットを自転車で回ってもらうことを目指しています。

公園での環境事業の一つが「なのはなプロジェクト」です。菜の花を育て、菜種油をバイオディーゼルの燃料にする試みです。また、犬のトイレ設置もあります。犬のマナー向上とともに、堆肥にして園内の肥料に使い、環境学習としての効果も狙っています。その他、初級園芸福祉士養成講座や、釜ヶ崎支援機構とのホームレス就労体験事業もあります。最初の1年間で約100名が体験に参加しました。

支援団体との協働による知的障害者の就労訓練事業では、職域開拓を視野に、花や園芸農業に関わる仕事につけないか、支援者と協働で種から苗、花壇作りまでを、プログラムとしています。また、工夫しながら園芸福祉の効用を活かし、知的障害者に植物への愛情を培ってもらう試みもおこなっています。

公園のホームレスのテントでは放火も頻発しています。そうした出来事を通じて地域の人たちにホームレスの問題を考えてもらおうと、新聞を発行しています。皆でおこなう将棋も、ある意味で「街かどデイサービス」ともいえますし、彼らは近くで遊ぶ子供たちを見守ってくれているともいえます。そういう位置づけで公園がつながっていったら、人の見方も変わっていくのではないかと感じています。

人のつながりと 経営

優しくなれる公園づくりへの挑戦にあたっては、課題もあります。啓発しない、押しつけない、排除しない公園とは、どうしたらできるのか。地域の人たちとつながりを持って一緒に運営していける公園をつくり、園内で障害者の就労訓練やホームレスの就労体験ができたら、こんなに面白く、素晴らしいことはないのではないかと感じます。

地域と交わっていくため、花壇づくりを始めました。地域の人に声をかけワークショップを開き、花壇のテーマやデザインなど、全部考えてもらいました。当日は雨の中を100人あまりに参加してもらいました。

私たちが社会のためにと始めたことが、結局は会

●●● 園芸福祉活動の様子



●●● <公園での環境福祉事業>



●●● NPO法人釜ヶ崎支援機構との ホームレス就労体験事業



社のためになりました。人と人とのつながりを大切にすることが経営に活かされたのです。実際に仕事も増えていますし、新しい「気づき」が戦略に変わったり、「人の役に立つ」喜びを感じてそれぞれのモチベーションが上がったりしています。清掃は、ものを作ったり技術を駆使したりすることは不要ですが、特に人と人とのつながりが大事な業種です。企業の技術が一人一人の人権を尊重することで磨かれていくことを、この数年で感じることができました。



■ パネル ディスカッション

炭谷●参加者の印象的な表情を見ても、これほど効果がある試みが、なぜ日本の社会福祉の中で発展してこなかったのか、と皆さん疑問に思われるのではないのでしょうか。私の考えでは、日本人は社会福祉に対して固定的な考え方にとらわれ過ぎているのではないかと。気の毒な人に対して何かをしてあげる、施してあげるものだという考え方です。それゆえ、極端に言えば、そうした人たちについては、生存可能な最低の内容さえ確保すればいい、馬やイルカと遊ぶ、花と戯れるなどは贅沢で、やる必要はない、とされかねない。このあたりに日本の社会福祉の悲しさがあると思います。本日の企画が、日本の社会福祉がこうしたプログラムを大胆に取り入れ、定着普及していくきっかけになればいいと感じます。

堀越●姥山さん、乗馬療法での指導する側の問題で何か困ったことはありますか？

姥山●障害者乗馬には、障害者を深く知っている・知りたいと思っている人材が求められ、同時に、馬についてよく知っている・馬が好きな人材が求められます。この二つを併せ持ったインストラクターが必要です。しかし日本では、馬事は裕福な家庭の人の趣味と見なされがちで、世界が狭い。また、馬は繊細な動物で、手間暇もお金もかかります。障害者も馬も知る人を育てる市場がどれだけあるか考えると、人材養成に国も尽力してほしい。また、障害者が特別なプログラムをやると「私もできないのに」というような健常者の声を耳にします。そんな声の中で20年やってきました。障害をもつ人々も人として豊かな人生を生きることは当たり前なんだということが常識として広がるといいと思います。

炭谷●乗馬療法は地域の活性化にも役立ちます。茨城県の旧大洋村では、障害者や高齢者に乗馬療法を利用して、さらに馬糞を活用して有機農法でイチゴを栽培しました。これが大評判でよく売れ、村が活気づき、また医療費も減少したそうです。障害者が人生の充実を感じるだけでなく、これを一つのきっかけにまち全体の環境や福祉にもいい影響があった。園芸療法でも同様ではないのでしょうか。

福田●ホームレスの場合、障害者と違うのは、問題解決のための支援のネットワークが未整備な点です。私たちは企業の立場ですので、「いいこと」をするだけでは続かない。乱暴な雇用を減らすためにも、支援のネットワークをもっと他企業に知らせていけば、賛同する会社も増えると思います。そのための

情報発信の必要を感じます。

炭谷●ホームレスが公園管理活動にたずさわることによって花や環境に関心を持ち始める、これが大切です。まさに元気がない一因は環境にあります。環境美化は釜ヶ崎の改善のポイントだし、全国の貧困地域に共通した課題です。

堀越●ゆきわりそうの実践する、多様な障害者から平等に能力を引き出す努力は、以前から評価が高いものですね。

姥山●障害があっても人として幸せに生きる権利があります。私は病院のMSWとして障害者を持つ家庭の惨状を見て、怒りを感じてきました。「幸せに生きるのがどうして罪悪なのか？」と、ゆきわりそうを始めました。障害者が喜びを感じる環境を整えようとたどり着いたのが、文化スポーツ活動です。マラソンや水泳、音楽ではカーネギーホールでの第九コンサートなど。講師の方の理解と支援を得て、障害者がステージに立ち、日々の暮らしに役立つような喜びを感じ、社会性も涵養できる。言葉や運動に支障があってもなくても、皆が参加できるプログラムを準備しています。時間をかけ、継続性を持ってやっていけば、必ずみんな、社会で一緒に暮らしていけるようになるという確信を持ちました。

堀越●福田さん、企業の側からは、知的障害者の就労機会をという実践で、採算ラインには乗っているのでしょうか？

福田●はい。当社では障害者が働くという点でプラスワンという考え方はまったくありません。企業の負担になっては無理がきて継続できません。必ず健常者と同様に仕事をしてもらい、同じ給料を払います。知的障害者もいろんな特性をお持ちですので、支援者と一緒にそれを考慮しつつおこなっていますが、これは私たちの得手不得手とまったく変わりません。私たちは、障害者を受け入れる際には障害者を優先して再配置し、みんなでフォローしていくことを心がけています。他にも、障害に関係なくみんなで声を掛けあう、お互いに関心を持つ。人と人が現場でつながり、障害者のちょっとした変化にも気づいていくことで、トラブルも回避でき、雇用定着へ結びつくことになります。

炭谷●環境福祉学会の目標の一つに「環境福祉ビジネスの構築」というのがありますが、福田さんの会社は環境福祉ビジネスの成功例の一つです。自然環境力を医療や福祉、まちの現場に活用する際、それを専門的に扱う民間企業に協力をお願いすることで、企業にとっても成長の機会となります。障害者がイルカと泳ぐ試みなど、特別なものになるほど、

民間企業との協力は欠かせません。そこに環境福祉ビジネスの意義が見出せるのです。

会場参加者●障害者雇用に積極的に取り組んでいる企業もありますが、特性も能力差もかなり幅広くなっています。雇用の際の条件はありますか？

福田●府や市の障害者の育成会が構成員となり、障害者に清掃の訓練などを実施する大阪知的障害者雇用促進建物サービス事業協同組合という団体があります。当社ではその訓練を数年間受けた方を紹介して頂いています。連携した支援を完全にするため、ここ以外からは受け入れません。トラブルがあった時にも、支援の連携がとれていれば、問題を隠さず一緒に解決できます。そこでは支援者との信頼関係が何より大事です。その他に条件はありません。

堀越●炭谷さん、本日のまとめをお願いします。

炭谷●今日は大変有益な議論ができました。自然環境力を利用した乗馬や園芸には大変効果があり、地域活性化や仕事創造につながる可能性も秘めていることが理解できました。こうしたさまざまな取り組みを日本の福祉の現場に定着・発展させていくことが重要です。

そのためのポイントは三つ。第一は、療法・セラピーの内容です。その信憑性への批判に答えるため、内容を常に検証し、互いに情報交換し、中身を高めていく努力が求められます。第二に、それを支える人が不足しています。しっかりした経験や知識、専門的な技術を持った人が必要です。同時に、自然環境力を福祉やまちづくりの現場に対してプロデュースする、そうした人材も足りません。環境福祉経営士のような資格が実効あるものとなれば、日本で自然環境力が活かされる時代がくるでしょう。第三は、お金の問題です。社会福祉のよりよいケアに、自然環境に関する工夫が含まれてしかるべきだという発想が、日本での常識となれば、運営費としても制度に組み込まれることになるでしょう。

以上、①研究によりプログラムの水準を向上させる②それを支える人をしっかり育てる③裏付けとなる資金の用意、この三つが整えば、自然環境力の福祉の現場での活用も進み、日本の社会福祉を格段に向上させるきっかけになるはずです。

堀越●環境福祉学会にも三つの大きな目標があります。①環境福祉のまちづくり②環境福祉ビジネスを発展させる③環境福祉コーディネーターを養成していく、この三点です。環境と福祉とを一つの融合概念で捉えていこうという私たちの考え方はきわめて21世紀的な方向だと信じています。ぜひ今後の活動にご協力よろしくお願ひいたします。